

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	長詩 : 文苑
Author(s)	愁人
Citation	龍南會雜誌, 135: 49-51
Issue date	1910-03-30
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/5874">http://hdl.handle.net/2298/5874</a>
Right	

# 長 詩

## ○雨

愁 人

肋骨の深い底に  
盤石があぶしかつて  
搾り出した汗のひまから  
灰色の愁につままれた  
我が心は甦る。

怡然<sup>ていぜん</sup>、死に臨む獲物のぐりて  
つきまどふ小犬か、  
唄ひ女の破れ笠をものぞく  
町奴でいもあるかのやうに、  
執念くもあざみながら  
我が心の埒にすがり来る  
あの……いたまいい  
注射の、

暗睡の、

さてはかすかな呼吸の……。

逝いたひとをたぎる耳に  
滅入るやうな、  
それは世の中の  
冷めはてた、  
薄つべらな、そして  
物と物とをそつと離間する、  
こんな感覚を混同<sup>でらやまぜ</sup>した、  
どこでも云ひたい  
雨の音が聞ゆる。

## ○頬のうるみ

くさぐさの性帯<sup>はたせ</sup>べる涙二十年  
交々徂徠してにじむに  
この頬あゝ遂に青ざめぬ。

肉に、靈に、足らはず、はた足らひて  
涙もろき我れいくそたび  
母の御手にこの頬ふかれしか。

慈愛——あはれこの頬ふかし  
やさしき手はも高く消れて  
幽暗くらがりを落ちゆく我れに涙の冷や。

知——情——相接せむとする  
喧暗の迷ひ路に立ちぬるいま  
廿年、嘗てなき頬のうるみよ。

### ○高き壁

みだれ髪、刻參ときまいりする咀呪のろいめ女  
青き燭して魔障の鏡によると  
はのかにあざみて路次をてらせる  
監獄の黒門高くともす瓦斯燈。

戯れに放げく礫の傷手重み  
息ほそりゆく幽鳥かそも秋を  
かすかの音、朽ちゆく魂を追うて  
黒ずむ土壁に小雨ぞなげく。

これや囚人みづからそがうるむ吐息を  
世の乾燥はじやぐ空よりたつと  
毒血色なす衣、それもあせたる  
肉のみか靈くゝる鉄鎖重う  
雨雲いくへども蔽はるゝ胸いだき  
血の氣なき唇の微動噛みて  
竦む足、踏みしだきつゝ  
うち震ふ手に高く塗りしあはれこの壁。  
垂るゝ休息の夜の幕がくれ  
我とわが塗れる壁につゝまれ。――

世に唯一つむすばるゝ夢こそ

階級のむさきさだめのがれて

平等の性帯べるめぐみなれ。――

あはれその夢、囚人のかなしき

悔いてゆく心の夢を

襲ひ來るあなや百鬼の槌に

終夜をば靈のをのゝぐ叫び。

## 短歌

### 散落

愁

人

山住めば腦にかすけき落葉のひゞき覺わてさびれゆく身よ。

執着のむさき生をうとみぬる枯葉は森にたい落つるなり。

歌反古もかたへに散りて僧たちの御酒温めし落葉くすばる。

思はむと欲りする思みを失せて思はじとする思のみ湧く。

谷底にくづをるゝかな音はなく人の終焉ご霜柱いま。

生と死の相接觸を隔てたる鈍き色帯ふ我が歌ぞとも。

子の心いまを御胸に抱かれむともがき泣けども棺のきびしき。

我は心黄泉路もとめて行きつかすまた歸り來ぬ雲飛ぶ夕。

胸琴の十三絃をひと思ひ斷つによき撥たまへ逝く人。